

令和 5 年 度

学 校 評 価
及 び
学校関係者評価



令和 6 年 1 月
浜松市立和田小学校

I 「知」知育向上プラン

1 児童の実態

昨年度末の教育課程において、本校の児童の実態を以下のように捉えた。

- 与えられた課題に一生懸命取り組むことができる。
- 友達の考えを共感的に受け止めることができる。
- 情報機器の扱いに慣れており、タブレットを使用した学習効果が高い。
- ▲ 学習に対して受け身な児童が多い。
- ▲ 目標や課題に対して向上心をもって粘り強く取り組むことが苦手。
- ▲ 自分の考えや思いを表現することに課題がある。

2 今年度の取り組み

(1) 授業改善の推進

本校の目指す子供像である「学びあう子」の具体として「課題を見つけ、自分の考えをもつ子」「考えを発表し合い、話し合うことで深め合う子」「ねばり強く学習に取り組み、達成感を感じ、自分を高める子」としている。本校の児童は、学習に対して受け身な児童が多く、そのため主体的に学ぶ児童を育てる必要があると考えた。そこで、昨年度に引き続き、研修テーマを「分かる喜び、学ぶ楽しさを実感できる子の育成」と定めた。

目標を達成するために、次のことを意識して取り組んだ。児童が課題に対して、「興味関心を持つ」「自分事として考える」「見通しを持つ」「粘り強く取り組む」「振り返り、次につなげる」ということを実践できるようになれば、子供自身の学びのサイクルが確立され、分かる喜び、学ぶ楽しさを実感できると考えて、実践を行ってきた。一人一回授業を公開し、学年ごとに授業検討、参観、事後研修を行って、授業改善に努めた。

① 授業規律・学習習慣の定着

- ・「守ろう 学習のやくそく」をそれぞれのクラスに掲示することにより、校内で約束事の共通理解を図ることができた。
- ・教科書やノートの他に、机の上には鉛筆と赤青鉛筆、下じきだけを準備することにより、学習に集中できる環境を作った。
- ・「家庭学習の手引き」を配付することにより、どのように家庭で学習に取り組めばいいかを一人一人が理解することができた。
- ・1年生はMIMを使用し、特殊音節の練習を行った。

② 学習内容にあったICTの活用

- ・道徳の学習ではFormsを使用してアンケートを行い、児童の実態把握に生かした。また、振り返りの場面では、初めの気持ちからどのように変化したのかをタブレットを使って、視覚的に分かるようにした。
- ・ドキュメントを使用し、めいけん学習や国語の提案文を作成した。その際、写真を取り入れて作成した。
- ・ドキュメントやスプレッドシートを使用して、新聞やパンフレットを作成した。
- ・オクリンクを使用して、制作物の写真を撮り、そこから学習の振り返りを行った。
- ・オクリンクやムーブノートを使用し、自分の意見や考えをまとめたり、考えを比較したりした。
- ・Jamboardを使用して、グループで話し合いを行い、意見をまとめた。

- ・Google スライドを使用し、共同編集で考えをまとめた。
- ・カメラやムービーの機能を使用して、外国語や体育、音楽などで演技や演奏の動画を撮り、客観的に自分の姿や成果を確認することができた。また、授業後の評価をじっくりと行うことができた。
- ・ドリルパークを使用して、練習問題を実施し、基礎基本の定着を図った。
- ・アプリを使ってタイピング練習、ローマ字練習、プログラミング学習を行った。
- ・タブレットを持ち帰った際に、算数の自主学習に取り組めるように課題を設定した。

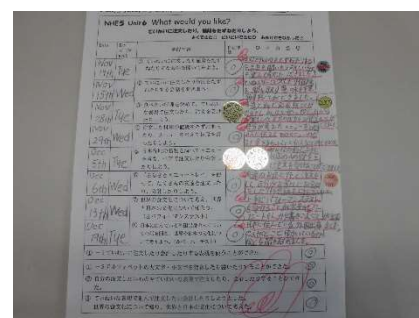
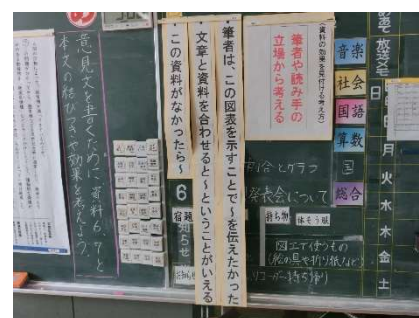
③ キャリア教育の充実

- ・この時間でどんな力を身に付けたいかを子供自身が認識できるように、配付するプリントにキャリアシールを貼った。
- ・今やっている学習でどんな力が付くのかを子供たちが認識できるように、4つの力について視覚的に分かるキャリアプレートに黒板に提示した。
- ・授業の終わりに振り返りを書かせることにより、その授業でどのようなことが身に付いたのか、どのようなことに困っているかなどを子供自身が意識をすることができた。
- ・目標をもって行事に臨むことで、自分のできたこと、できなかったことを意識することができるようになった。
- ・友達の考えや作品のよさを認めて、自分の学習に取り入れる場を設定した。



〔成果と課題〕

- タブレットの持ち帰り学習として、家庭で自分の考えを書くように計画を立てたので、話し合い活動が活発になった。さらに、発展問題に取り組む時間も十分にとることができた。
- 子供たちが意欲的に意見を書けるようになり、文量も増えた。
- 昨年度、情報モラルの年間指導計画を作成して、それに沿って指導を行ったため、スムーズに指導をすることができた。
- オクリンクやムーブノートを使うことで意見をまとめたり、友達の意見と比較したりすることが容易になったため、意見交流が活発になった。
- キャリアプレートを活用することで、子供たちが付けたい力を意識して学習に取り組むことができた。
- 振り返りを重ねることで、子供たちの学びを把握し、必要な支援を行うことができた。
- ▲低学年は、タイピングに慣れていないので、入力に手間取った。



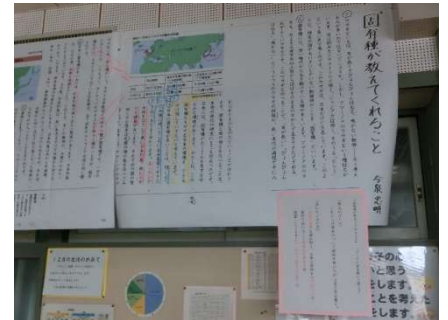
(2) 発達支援教育の充実

① 授業UD（ユニバーサルデザイン）の導入

誰もが学習しやすい環境づくりや、抵抗なく学習に取り組むことのできる手立てを、発達支援コーディネーターより紹介してもらう機会を校内研修として設けた。そして、各学級で以下のような実践を行った。

<学習に集中しやすい環境づくり>

- ・教室全面に余分な物は貼らず、視覚的にすっきりさせる。
- ・机に出すものを確認し、すっきりした机上で学習できるようにした。
- ・タイピングをする際に、大文字・小文字の壁があったので、キーボードに大文字のアルファベットを書いたシールを張った。
- ・学習の見通しがもてるように、前時までの学習の流れが分かるものを掲示した。



<授業中の手立て>

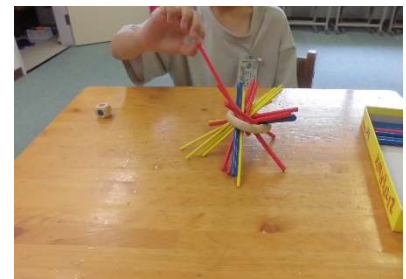
- ・単元計画を子供にも配ることにより、授業の見通しをもてるようにした。
- ・スモールステップを意識して学習を進めた。授業の始めからいきなり課題に取り組むのではなく、前の時間の復習から始めることで、自分から取り組みやすい状況を作った。
- ・めあてを書き、本時の学習を焦点化した。
- ・授業をパターン化し、学習の流れを把握して取り組むことができるようにした。
- ・視覚的に理解を促す図や写真を板書に使用した。また、必要に応じてテレビに問題や子供の意見を映した。
- ・具体物を用意し、実際に作業して思考や理解を深めた。
- ・ヒントカードを用意し、必要に応じて活用できるようにした。
- ・発表や振り返りの話型・文型を示した。
- ・ペアやグループ学習を取り入れ、考えを確認・共有する機会を設けた。
- ・タブレットで提出された課題を互いに見られるようにしておき、自分の意見をもったり、自分の考えに自信をもたせたりした。



② あんず教室との連携

通級指導教室である「あんず1・2」、発達支援教室である「あんず3」と連携を図り、個別の支援を必要としている児童に、個に合った指導を行った。

- ・あんずファイルを通して、あんず教室での指導内容を担任、保護者と共有した。また、コメント欄を用いてあんず教室、学級、家庭での様子への共通理解を深め、指導に生かした。



- ・「あんず参観週間」を設けることで、学級担任があんず教室での指導を参観し、各児童の実態を把握したり、個に合った支援の仕方を知ったりする予定である。

(3) 浜松市計算力調査の結果

- ・日時 令和5年4月15日(金)
- ・対象 2～6年生
- ・教科 算数

	2年	3年	4年	5年	6年
平均正答率(市)	91%	89%	80%	71%	75%
本校の状況	ほぼ同じ	ほぼ同じ	ほぼ同じ	下回る	上回る

〔考察〕

基本的な計算はよくできている子が多い。しかし、小数や分数を含んだ計算や「100万より10小さい数」というように言葉で表された問題を苦手としている傾向にある。特に、概数、分数と小数の混ざった計算が苦手である。

また、言葉や式で考えを示しながら筋道を立てて解いていく問題も、文章理解、算数用語の理解、計算の意味の理解、必要な情報の使い方などに難がある。

授業の中で、四則混合の計算などの練習だけに限らず、問題の場面理解を明確にし、見通しのもち方などの理解を図っていきたい。

(4) 全国学力調査の結果

- ・日時 令和5年4月18日(火)
- ・対象 6年生
- ・教科 国語・算数

	全国	浜松市	和田小学校の状況
国語	67.2	67	全国平均とほぼ同等
算数	62.5	64	全国平均より、上回る

〔考察〕

① 国語

解答傾向は、問題による多少の差異はあるが、国や県とほぼ同様である。

○出題は1問のみだが、「書くこと」の正答率が高い。

○知識を問う問題は、比較的正答率が高い。

●無解答率が高い。特に記述式や思考をとまなう問題に顕著に表れた。

② 算数

解答傾向は、問題による多少の差異はあるが、国や県とほぼ同様である。

○すべての領域において、県・国の平均正答率を上回った。

○特に図形の正答率は県と比べて8%ほど高い。

●無解答率が高い。特に思考をとまなう問題に顕著に表れた。

▲「変化と関係」領域の正答率が低い。

【質問紙からみた傾向】

計画を立てて勉強することや一日の勉強時間については、県・国と比べると意識の低さや時間の短さが見られた。また、自分の考えがうまく伝わるように工夫して話すことや、課題解決に向けて進んで取り組むことについても低い結果になった。

国語・算数の調査結果と結び付けて考えると、与えられた課題に対しては一生懸命

に取り組むが、それ以上を求めたり、進んで取り組んだりすることが課題だと考えられる。本校の子供たちの良さをさらに伸ばしながら、これらの課題を改善していければと思う。

3 来年度の取り組み（改善点）

（1）校内研修を通して

- ・基礎基本の定着を図るために、ノート指導の方法や宿題の出し方、指導法などを話し合う機会を設けることでどのクラスでも同じ指導ができるようにする。
- ・全国学力学習状況調査の結果から進んで取り組んだり、与えられた課題以上のことを求めたりすることに課題が見られる。そのため、普段の授業の中で児童自身が自己調整しながら学習を進めていくことができるように、教師が児童一人一人に応じた学習課題を提供し、それぞれの学習が最適となるように工夫する。
- ・自分の考えをきちんと伝えられるようにするため、家庭で学習課題について考える時間を設定したり、ICTを活用したりする。

（2）授業・日々の活動の中で

- ・基礎基本の定着を図るために、授業の規律を見直し、学習習慣も定着させる。
- ・スモールステップや学習のパターン化で「やればできる」「できた」が実感できる授業を行う。
- ・児童が見通しをもって学習に取り組むために単元の始めに学習計画を提示したり、児童の学習の定着度や困り感を見取るために、振り返りを行う時間を設定したりする。
- ・学習の目的に合わせて ICT を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを充実させる。
- ・学習活動の中で ICT を低学年から活用できるようにタイピングの技能の定着を図る時間を設定する。
- ・学習に集中して取り組めるようにするために、授業 UD を進めていく。

Ⅱ「徳」徳育向上プラン 「認め合う子」の育成のために

1. 心の教育を推進する道德教育・特別活動

(1) 昨年度の実態

道德教育・特別活動に関する学校評価アンケート（１２月実施）の結果

Q4 生活や学習の中で、チャレンジし頑張っていることがある。

児童 91.6% 保護者 回答項目なし

Q5 ぼく／わたしは、友達に優しくすることができる。

児童 94.1% 保護者 97.5%

Q6 ぼく／わたしは、進んで挨拶をすることができる。

児童 88.5% 保護者 75.4%

Q8 ぼく／わたしは、健康や安全に気を付けて、生活している。

児童 94.7% 保護者 91.4%

Q10 やるべきこと（係活動、宿題、明日の支度など）を進んでできる。

児童 91.7% 保護者 65.4%

- 児童の多くが友達と協力して学習したり仲良く遊んだりすることができる
- 自分の係や委員活動などに意欲的に取り組むことができる児童が多い。
- 校内においては、多くの子が自分から進んで挨拶をすることができる。
- ▲ 相手への思いやりに欠ける言動をして、トラブルになる場合がある。
- ▲ 挨拶は、個人差が大きく、校内と校外の差も大きい。
また身近な人にはできても、来校者やお客様に進んでできる児童は少ない。
- ▲ 廊下や階段を走ったり右側通行を守らなかったりする児童が多い。
通学路では、道路に広がったり車道にはみ出したりして歩く児童が見られる。
- ▲ 学校生活や家庭生活における自分の行動について、児童自身の評価と保護者の評価の差が大きい。

(2) 今年度の取り組み

① 心の教育を推進するために

本校の目指す子供像である「認め合う子」の具体として「自他を知り、自分らしさについて考え、自分と他者の違いを受け入れる子」「互いのよさを見つけ、自分に自信をもち、他者を励ます子」「互いを思い合い、自分の判断で正しい行動をする子」としている。その具現化のために、主体的な学び、対話的な学びを重視した道德教育の充実を図り、自分事として考えたり、物事を多面的にとらえる力や正しく判断する力を育成したりすることに努めた。また、異学年交流を通して、自他の違いを知るとともに、互いを思い合い、互いの良さを認め合う姿を目指した。

手立て1 道徳科の授業の充実

タブレット端末を活用することで、事前のアンケート結果を提示したり、児童一人一人の思いを表したり、また他の子の思いを知ったりすることができた。言葉で表しにくい内容であっても、数値化したり図で表したりして視覚化することで、自分の思いを表現したり、相手との違いを比べやすくなったりし、価値の深化につながった。



2年生の実践では、他者との交流を取り入れたり、担任から、児童一人一人のよさが書かれたカードを配ったりする活動を行うことで、「わたしのよさ」に気付くための手立てとした。さらに、家の人からの手紙をサプライズでもらえたことで、より自分のよいところに自信をもつことができた。



手立て2 「いつでも、どこでも、だれにでも」できる挨拶指導

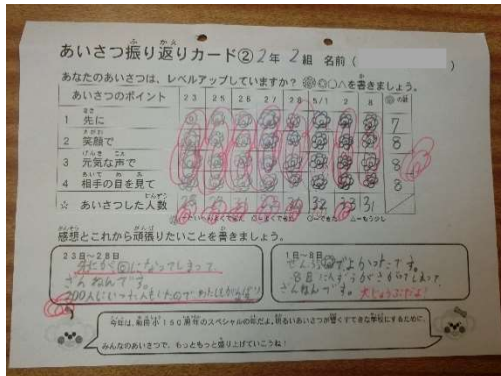
挨拶の実践については、例年保護者からのアンケートで課題とされる項目である。

毎朝、職員が昇降口や門での声掛け、毎月のPTAとの挨拶運動、校内では生活委員の児童が、休み時間に校舎内をまわりながら挨拶の呼び掛けをしている。

年度当初には、生活委員会で作成した動画を視聴し、挨拶することの意義や大切さを伝えた。集団登校の際には、リーダーを手本に気持ちのよい挨拶をしようという意識を高めていった。また、自分の挨拶を振り返るワークシートも活用し意識の継続を図った。

1年生では「挨拶大作戦」として、校内の職員に挨拶し自己紹介する活動に取り組んでいる。また、校内には、中学校区での募集した挨拶標語を掲示した。

校内で教職員に対して挨拶ができる児童は増えてきたが、来校者や校外では、進んで挨拶ができる児童はまだまだ少ないといえる。



② 他者との関わり方を学ぶ機会「心の日」の設定

月に1回「心の日」を設定し、児童の心の安定と成長を促すための取り組みをし、心が温かく、そして優しい気持ちになるような話を聞いたり、自分の心を見つめたりした。また、構成的グループエンカウターのショートエクササイズなどを取り入れ、自己理解や他者理解を進めたり、自己肯定感を高めたりすることを目標とした活動を行った。

手立て1 一人一人のよさや、価値観の多様性を認める方法

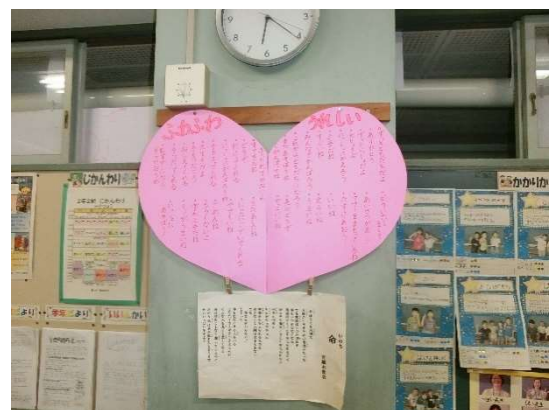
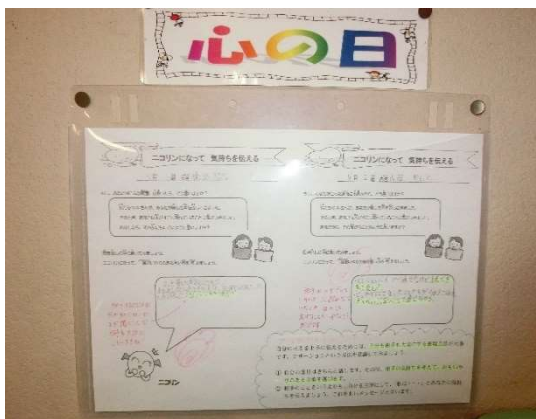
発達支援コーディネーターから紹介された「出会いのエクササイズ」や「他者理解のエクササイズ」では、グループで協力して絵しりとりをしたり、自分が選択したものをペアで紹介したりするゲームを行った。

簡単なゲームを通して、自分のことを知ってもらったり、相手のことを理解したりするよい機会となっている。



手立て2「心の日」と関連を図った継続的な指導

「心の日」では、養護教諭や発達支援コーディネーター、生徒指導主任、保健主事などから、児童の「心」の成長、発達に応じた説話を行ってきた。「心の日」の取り組みに価値づけをし、話し合いの時間を設けたり、関連した教材を扱ったりした。また、教材やワークシートなどは、教室内の掲示をし、振り返りができるようにした。



③ 異学年集団による活動

手立て1 縦割り活動

1年生から6年生までが混在する縦割り班を編成し、清掃を中心に活動した。高学年にとっては、低学年に対する思いやりを育てる場となり、低学年にとっては、身近に手本があることでより良い活動の仕方を学ぶ機会となった。



手立て2 ペア学年による異学年交流

最上級生である6年生が1年生とペアを組み、年間を通して交流している。1年生を迎える会では6年生が中心となって会の運営を行った。ペアでの顔合わせをきっかけに関わりを深め、朝の支度を手伝ったり、校内を一緒に見て回ったりした。その後も、休み時間に遊んだり互いの教室を行き来したりして交流している。3学期の6年生を送る会は、こういった関わりや、その中で見られた6年生の思いやりへの感謝を伝える機会としたい。



2年生は主に生活科の時間に1年生と交流した。1学期は2年生が和田小の先輩として校内を案内した。2学期は、生活科で制作したおもちゃやゲームを1年生に披露した。体育館を会場にお店を開き、1年生に紹介したり一緒に楽しんだりした。



手立て3 委員会活動を通した異学年交流

それぞれの委員会を中心に異学年交流を行った。計画実行委員会では、創立・開校150周年を機に、これまでの「和田っ子の心得」を見直すため、全校児童から意見を募ったり代表委員会を実施し意見を集約したりして、新しく「和田っ子宣言」を決め、150周年式典の中で発表した。放送委員会では、児童に聞いたアンケート結果を校内放送で発表したり、図書委員会や保健委員会では、委員会の仕事を紹介したり体験したりするイベントを実施し下級生と交流した。



(3) 現在の児童の姿

道徳教育・特別活動に関する学校評価アンケート（R5 1 2月実施）の結果

Q3 ぼく／わたしは、友達に優しくすることができる。

児童 95.1%(+1%) 保護者 94.6%(-2.9%)

Q4 ぼく／わたしは、進んで挨拶をすることができる。

児童 89.5%(+1%) 保護者 73.5%(-1.9%)

Q6 ぼく／わたしは、健康や安全に気を付けて、生活している。

児童 94.6%(-0.1%) 保護者 87.9%(-3.5%)

Q8 やるべきこと（係活動、宿題、明日の支度など）を進んでできる。

児童 90.1%(-1.6%) 保護者 63.8%(-1.6%)

(4) 成果と課題

- 異学年間では、優しさや思いやりにあふれる姿が多く見られた。
- 心の日の掲示を設けたことで、授業中や生活の様々な場面の中で、想起させることができるようになった。
- 健康や安全についての放送や指導を行ってきたため、児童の意識ができてきた。
- 挨拶については、校内では進んで行う児童が増え、習慣が身に付いてきた。
- ▲ 同学年での関わりの中での配慮に欠ける言動が見られる。
- ▲ 挨拶ややるべきことなどについて、児童の自己評価は高いが、家庭や地域の中では進んで実践することができていない。

2. 生徒指導の充実

(1) 昨年度の実態

① 令和4年度の学校評価アンケート結果（12月実施）の結果

Q1 ぼく／わたしは、楽しく元気に学校に通っている。

児童 95.2% 保護者 94.1%

Q9 先生は、ぼく／わたしのよいところをほめている。

児童 92.8% 保護者 90.1%

Q10 ぼく／わたしのクラスは楽しく、教室は安心できる場所である。

児童 90.9% 保護者 90.1%

Q13 先生は、こまったことがあると、お話をきいてくれる。

児童 91.0% 保護者 88.2%

- 学級の雰囲気づくりの結果、楽しく、安心できる場所と感じる児童が増えた。
- 結果として、学校が楽しく元気に通える場所と感じている割合も増加した。
- ▲ 保護者の評価は、児童の評価より、全体的に低い。
- ▲ 教室が安心できる場所ではない、先生はこまったときに話を聞いてくれないと感じている保護者の割合が増えた。

② 令和4年度のいじめ・不登校の実態

- ・ 市教育委員会へのいじめ報告件数 … 42件
- ・ 30日以上欠席している不登校児童数 … 6名
- ・ 校外まなびの教室へ通級している児童数 … 3名

(2) 今年度の取り組み

① ほめて伸ばす指導

本校の目指す子供像「認めあう子」を実現するためには、まず教師自身が児童一人一人の良さを見つけ、それを認めていく必要があると考えた。教師の働きかけをきっかけとして、児童自身が自分の良さに気づくとともに、他者の良さを知る機会とする。そのような活動を積み重ねていくことを通して、学級の雰囲気をより良いものとし、児童自身が互いの良さに気づき、認めあう姿を育てていくことを目指した。

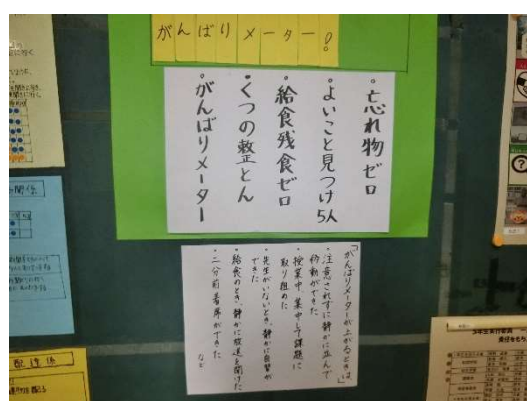
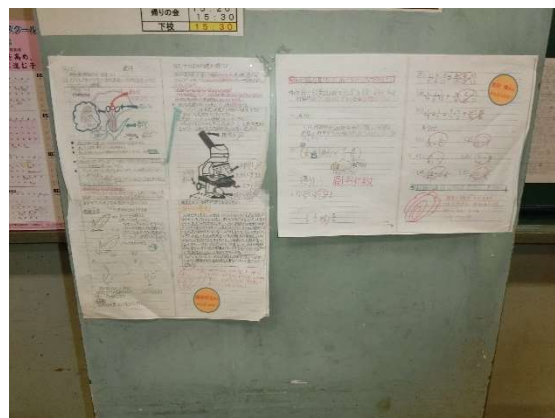
手立て1 一人一人の行いの価値づけ

教育活動の中で見られる児童の良い行動を教師の話や掲示物で称揚した。その際に意識したことは、「だれの・どの行動に・どんな価値があったか」を「本人が自覚し、学級全体が理解できる」ということである。行動をただほめるだけでなく、一人の良い行動が集団に与える影響や、その行動の意味について教師が価値づけることで、具体的にその良さを認識できるようにした。



手立て2 集団としての雰囲気づくり

一人一人の行いを価値づけ、互いの良さを認めあうことと並行し、集団としての雰囲気づくりを行った。係活動や学習面での頑張りなど、当たり前で頑張っている子をほめることで、集団の雰囲気が温かいものとなるようにした。手立て1と同様に、この場合も価値づけを大切にすることで、集団として成長している感覚をもたせるようにした。また、学級全体で出し合った意見や頑張りの基準も掲示し、いつでも確認できるようにした。



② 気持ちに寄り添う相談・指導

児童・保護者からの相談内容は、学習や友人関係だけでなく、家庭環境や子育て、発達支援に関わることなど、多様化かつ複雑化している。こういった様々な相談のニーズに応えるため、定期的な相談の機会を確保するとともに、日常的な相談に対しても、職員の中で分担を決めて対応に当たった。

手立て1 定期的な相談機会の確保

- ・夏季・冬季教育相談…年2回（夏季は全家庭、冬季は希望制 約300家庭）
- ・いじめの早期発見のための「すこやかアンケート」…年4回（5、6、10、1月）
※はままついじめアンケート（9月実施）
- ・スクールカウンセラーによる希望相談…年20回設定（12月末、延べ20人実施）

手立て2 日常的な相談への対応

- ・学習や学級内の友人関係など …学級担任
- ・他学級の児童や他学年との関わり …学年主任
- ・健康面をはじめ、学級では話しにくい相談 …養護教諭
- ・発達面の相談や、他者との関わり …発達支援コーディネーター
- ・問題行動や、行動面の心配事 …生徒指導主任
- ・いじめの疑いやいじめの対応 …いじめ対策コーディネーター
- ・行政機関や医療機関などの社会福祉 …スクールソーシャルワーカー(SSW)
- ・児童心理や子育てについての相談 …スクールカウンセラー(SC)

SSWには社会福祉の専門家として、保護者の相談にのってもらうとともに、行政や医療等の各種外部機関との連絡、調整をしてもらっている。SCには心理の専門家の立場から、保護者の相談にのってもらっている。また、職員に対しても助言をもらっている。

(3) 今年度のいじめ・不登校の実態（2学期末時点）

- ・市教育委員会へのいじめ報告件数 …261件（+219件）
- ・欠席30日以上の不登校児童 …15名（+9名）
- ・校外まなびの教室へ通っている児童 …4名（+1）
- ・フリースクールへ通っている児童 …1名（昨年度より）

昨年度から、いじめ報告件数が大幅に増えた要因として、児童・保護者・教職員のいじめに対する認識の変化がある。以下にいじめ防止対策推進法にあるいじめの定義を示す。

「いじめ」を「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義する。

これまで、一般的な観念として、いじめは「1対多の構図」、「立場の上下がある」、「複数回行われている」、「意図的な行為」などという捉え方をされてきた。しかし、いじめ防止対策推進法の定義によれば、人数や力関係、回数や行為の意図などに関わりなく、被害者が心身の苦痛を感じるものとしている。

本校でも、浜松市の「いじめ防止等のための基本的な方針」の改訂を受け、いじめの定義とその認識を改め、対応を進めてきた。校内いじめ対策委員会の中で、教職員内のいじめに対する認識や、組織的な対応についての研修も積み重ねてきた。

また、いじめ発見のためのアンケート「すこやかアンケート」には、配付した際に、上記の定義を明示するようにし、保護者の認識、理解が深まるようにした。またアンケートは家庭に持ち帰り実施することとし、保護者と一緒に確認し提出する

ようにした。些細な内容であっても、不安に思うことや心配なことが明記されることが増え、いじめの認知につながることであったため、いじめの認知件数が増加したと考えられる。

具体的なケースとして、「休み時間に友達から嫌なことを言われた。」「遊びの中で押されて嫌な気持ちになった。」などがある。その行為が一回だけであったとしても被害者が心身の苦痛を感じていればいじめとして認知をする。また、行為の意図を条件に含めないため、良かれと思って言ったり行ったりしたことについても、相手が苦痛を感じていればいじめとして認知している。

加えて、浜松市の取り組みであるタブレットを用いたアンケート「はままついじめアンケート」を実施した。上記の定義に基づき、児童が心身の苦痛を感じている項目にチェックをすると、その内容の深刻度合いによって、赤や黄色のアラートが出され、担任や担当は児童の状況を確認することができるものである。

このアンケートによるいじめの認知は、185件になった。日常生活の中で起こりうる児童間でのトラブル、もめごとによる内容が多くを占めたが、重大ないじめにつながる事案も発見することができた。このアンケートの実施目的の一つでもある早期発見、早期対応することができたため、深刻化することなく、該当児童への指導、支援、保護者対応まで進めることができた。

結果として、認知件数は一昨年度の4件、昨年度の42件と比べ、大幅に増加しているものの、校内において、いわゆる学級崩壊のような様子が見られたり、これまでの一般的な観念としてのいじめが頻発していたりするわけではない。むしろ、このような細かな認知と早期対応をしていくことで、いじめ重大事態を防ぐことへとつながっていると考えている。

加えて、細かな認知と早期対応をしていくためには、組織的な対応が不可欠である。そのため、校内のいじめ対応についての流れを整理し、職員一人一人がそれぞれの役割を果たすことで問題解決へと向かえるようにした。また、管理職を交えての対策委員会を開き、情報の共有化や今後の対応方針などを検討した後、児童への聞き取り、指導などを進めていくことを行ってきた。担任だけが抱えこむことなく、組織的な対応を進めることで、いじめの早期対応や深刻化を防ぐことができた。

本校における「いじめ防止等のための基本的な方針」についても、市の方針改訂を受け、改訂を行った。今後も、毎年見直しをして、本校の実態も対応できる内容に改訂を進めていく。

不登校、不登校傾向の児童は、増加傾向にある。昨年度から継続している児童もいるが、本年度になり不登校の基準となる年間30日以上欠席をしている児童が増えた。個別の欠席状況をみると、対象児童のうち、継続10日以上欠席の児童は5名である。それ以外の児童は、体調不良や気分不快、家庭環境、または自身の心身の調子を整えるためなどにより、週2、3日の欠席が累積した児童が多い。家庭との連絡、連携を密にしながらも、児童に適した環境を整えていくことも課題と考える。

保健室登校は、3名の児童がいるが、うち2名は校外まなびの教室に通っている。もう1名は、これまでの不登校傾向から保健室登校ができるようになってきた。

校外まなびの教室に通っている児童は4名いるが、3名は定期的に学校に通うことができている。不登校傾向であった、現6年生児童は、4年生から校外まなびの教室に通い始めたことが学校復帰の一つのきっかけとなった。現在では月に1回程

度の利用するほどで、学級ですごすことができている。今後も、児童の状況に応じて、選択肢の一つとして勧めていきたいと考える。また、地域のフリースクールに通っている児童もいる。児童の実態に合っている様子で、継続して活用している。学校以外での児童に適した学びの場を地域と連携して進めていく必要がある。

(4) 成果と課題

① 令和5年度の学校評価アンケート結果（12月実施）の結果

Q1 ぼく／わたしは、楽しく元気に学校に通っている。

児童 95.5% (+0.3%) 保護者 93.3% (-0.8%)

Q9 先生は、ぼく／わたしのよいところをほめている。

児童 91.4% (-1.4%) 保護者 87.4% (-2.8%)

Q10 ぼく／わたしのクラスは楽しく、教室は安心できる場所である。

児童 89.7% (-1.2%) 保護者 87.9% (-2.2%)

Q13 先生は、こまったことがあると、お話をきいてくれる。

児童 91.9% (+0.9%) 保護者 85.8% (-2.4%)

- 学校全体としては、楽しく元気に学校に通っている児童の割合は多い。
- 教師と児童の関係もおおむね良好ととらえることができる。
- ▲ 昨年度と比較すると、保護者の結果は全体的に低下している。
- ▲ 教室が楽しく、安心できる場所ではないと感じている児童の割合が増えた。
- ▲ 保護者が学校の様子を直接みたり、教師と話す機会が少なかったりすることから、学校活動や教師に対する評価が下がった。

3. 来年度に向けての改善点

(1) 道徳教育・特別活動

- ・「和田っ子宣言」の具現化を目指した活動の取り組みや工夫
- ・道徳の授業が、より実生活に返っていくものになるような課題の設定や発問の工夫。
- ・挨拶の意義や対象、その効果について、児童が具体的に理解するための手立て。
- ・生活委員会を中心に、低学年だけでなく高学年も進んで挨拶ができるようにするための指導。
- ・心の日の活動の意味や、その日の活動の目的を児童に理解させるための工夫。
- ・係活動や委員会活動など、自分の頑張りが形になるような振り返りや価値づけ。
- ・日々の授業を充実させることで、宿題や身支度への意欲をもたせる。
- ・学年集会やイベント、相手意識を育てるための取り組みや交流の場の設定。

(2) 生徒指導

- ・いじめ防止のための基本的な方針の改訂
- ・いじめの早期発見、早期解決に向けた年間での指導計画策定。
- ・「いじめ見逃し0」を目標に、日頃の関わりや観察、アンケートなどの取り組みの工夫。
- ・相手を思いやった言動が実践できるような支援や声掛け。
- ・一人一人の良さを価値づけ、集団へと返していく方法の工夫。
- ・相談の機会を逃さないようにするための日々の声掛けの工夫。

Ⅲ 「体」体育・安全向上プラン

1 昨年度からの課題と成果

(1) 体力向上の取り組み

- コロナ禍が明け、マスクを取って意欲的に運動したり、外で遊んだりする児童が増えたこと。
- △ コロナ禍より続いていた体力の低下傾向が、依然として見られる。
- △ 外遊びに出る児童と、教室で過ごす児童が二極化している。

(2) 保健指導

- 「ぴかぴかチェック」、「アウトメディアの日」を通して、子供たちが自分で健康に過ごそうとする考えが見られたこと。

(3) 食育指導

- 毎月の給食の献立を栄養価別に出すことで、自分の食べているものがどのように自分の食事にいきているのかが分かった。
- ホワイトボードを活用することで食材の栄養素に注目できた。

(4) 安全教育

- 防災訓練、防犯訓練を通して、子供たちの危険に対する意識は高まった。
- △ 実際の登下校の様子を見ていると、自分の行動が危険につながっていることに結びついていない。

2 今年度の取り組み

(1) 体力向上に向けての取り組み

④ 教科体育

○運動の楽しさを味わい、さらに挑戦したいと思える授業

運動をしていて楽しいと思える瞬間は、自分がその運動ができたと思える時である。特に、それまでできなかったことが「できた」と思える瞬間をより多く味わわせたい。そのためには、すべての授業でめあてをもたせ、どんなことができるようになりたいかをイメージさせる必要がある。そのうえで授業での運動量を確保したり、自分の運動を振り返って次の動きに生かしたりすることで、更なる発展的な技能を身に付けることができる。このような指導ができるよう以下の点を重点として指導した。

【重点項目】

- ・ 技能の高まりを実感し、進んで運動に取り組む意欲を育むための学習カードの活用。
- ・ 児童が自分に合った作戦や場を選択できるように場の設定を工夫する。
- ・ 多種多様な運動領域の基礎的な力を伸ばすための補助運動の実施。
- ・ 自己を分析し、技能の高まりを促すためのICT機器の活用。



⑤ 体育的行事

○校内運動会の実施

昨年度同様に午前中で全校開催をした。児童自らが作り上げ、やり遂げられたという達成感をもたせるために、児童を中心とした行事運営を行った。具体的には以下のような取り組みをした。

- ・ 6年生の応援団が各クラスに応援の仕方を教える場を設定し、それをもとに各クラスの応援団を中心に練習し、当日も主体的に応援を行った。
- ・ 各学年から、開閉会式でがんばりたいこととがんばったことの発表者を選出し、活躍の機会を作った。



○新体力テストの実施

児童一人ひとりが自らの体力・運動能力を知るために、新体力テストを実施した。昨年度の記録を配付し目標をもたせて取り組むことができた。

⑥ 教科外体育

○運動委員会主催のイベント

全校児童にもっと運動を好きになってほしいという思いから、運動委員会で考えた遊びを動画で紹介した。また、外遊びの人数が減る傾向がある3学期には、運動する機会を作るためになわとびイベントを予定している。



○ドッジボールコートの常時設置

運動委員会の常時活動として、毎朝、運動場にドッジボールコートのラインを引いた。子供たちが遊べる場を意図的に作ることで、外に出て遊びたい、運動したいという気持ちをもたせ、運動に親しむことができるようにした。

◎ 今年度の取り組みに対する結果と考察（体力向上）

<新体力テストの結果>

※ 水色がついている種目は、昨年度の浜松市の平均を下回っていて課題となる種目
 桃色がついている種目は、浜松市の平均よりもすぐれていた種目

<男子>

		握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトルラン	50m 走	立ち 幅とび	ソフトボー ル投げ
1年	R4浜松	9.38	11.92	26.87	27.46	20.60	11.52	117.03	8.65
	R4全国	9.24	12.05	26.39	28.28	18.92	11.33	117.03	8.43
	R5和田	9.09	12.64	24.27	26.45	16.42	11.29	112.02	8.96
2年	R4浜松	10.78	13.99	28.85	31.09	27.70	10.83	125.69	11.62
	R4全国	10.74	13.86	28.61	31.65	28.40	10.55	127.19	11.08
	R5和田	9.33	16.47	26.84	28.12	23.16	11.17	116.60	10.60
3年	R4浜松	12.55	15.65	30.46	33.92	32.80	10.21	135.05	14.66
	R4全国	12.73	15.73	30.34	34.95	36.45	10.07	136.77	14.74
	R5和田	11.53	16.68	27.15	33.17	33.47	10.43	145.82	14.88
4年	R4浜松	14.34	17.48	31.98	38.13	39.21	9.84	143.50	17.35
	R4全国	14.39	17.98	31.78	39.43	44.27	9.59	147.73	18.47
	R5和田	13.80	18.92	30.84	34.63	41.78	9.51	144.47	19.24
5年	R4浜松	16.60	19.35	34.19	42.07	47.17	9.45	152.61	20.69
	R4全国	16.90	19.94	33.37	42.83	52.45	9.24	155.86	21.75
	R5和田	15.04	19.90	33.74	43.04	45.67	9.48	153.46	22.80
6年	R4浜松	20.08	21.33	37.04	45.17	55.45	8.96	165.58	24.11
	R4全国	19.77	21.65	35.78	45.86	61.16	8.84	166.33	25.43
	R5和田	18.13	19.71	35.22	39.54	48.42	8.99	160.80	23.18

<女子>

		握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトルラン	50m 走	立ち 幅とび	ソフトボー ル投げ
1年	R4浜松	8.90	11.51	29.44	26.65	16.55	11.87	109.65	6.00
	R4全国	8.71	11.56	28.78	27.39	15.75	11.77	108.78	5.70
	R5和田	8.61	10.44	25.02	24.42	12.93	12.09	103.64	4.88
2年	R4浜松	10.07	13.06	31.80	29.83	21.42	11.20	117.44	7.69
	R4全国	10.18	13.46	31.01	30.74	23.14	10.89	119.28	7.36
	R5和田	9.69	17.40	30.78	28.71	19.98	11.44	110.22	7.57
3年	R4浜松	12.06	15.06	34.19	32.71	25.46	10.52	128.28	9.81
	R4全国	11.95	15.91	33.91	33.75	29.13	10.32	130.53	9.45
	R5和田	10.34	15.62	30.77	29.77	22.63	10.85	129.81	9.45
4年	R4浜松	14.06	16.53	36.41	36.71	31.08	10.11	136.83	11.69
	R4全国	13.87	17.64	35.52	37.64	35.60	9.91	141.05	11.61
	R5和田	12.43	17.35	32.20	31.92	28.61	9.80	128.86	11.55
5年	R4浜松	16.62	18.19	39.00	40.44	38.86	9.67	145.32	13.96
	R4全国	16.49	18.68	37.30	41.00	42.33	9.49	148.36	13.86
	R5和田	15.32	19.15	39.39	41.56	38.29	9.86	147.93	13.76
6年	R4浜松	19.24	18.80	41.62	42.41	42.11	9.31	152.77	15.52
	R4全国	19.53	19.66	40.71	43.44	47.52	9.16	155.76	15.97
	R5和田	18.86	19.72	41.72	39.62	44.28	9.21	153.79	12.90

(2) 保健指導

① 「ぴかぴかチェック」による衛生管理指導

月2回、朝の会に実施することで、身の回りを清潔にするための意識付けをした。結果は昼の放送で保健委員会が全校に伝えた。ほけんだよりでも定期的に実施結果を伝え、家庭への啓発も行った。

② 「アウトメディアの日」によるメディアコントロール

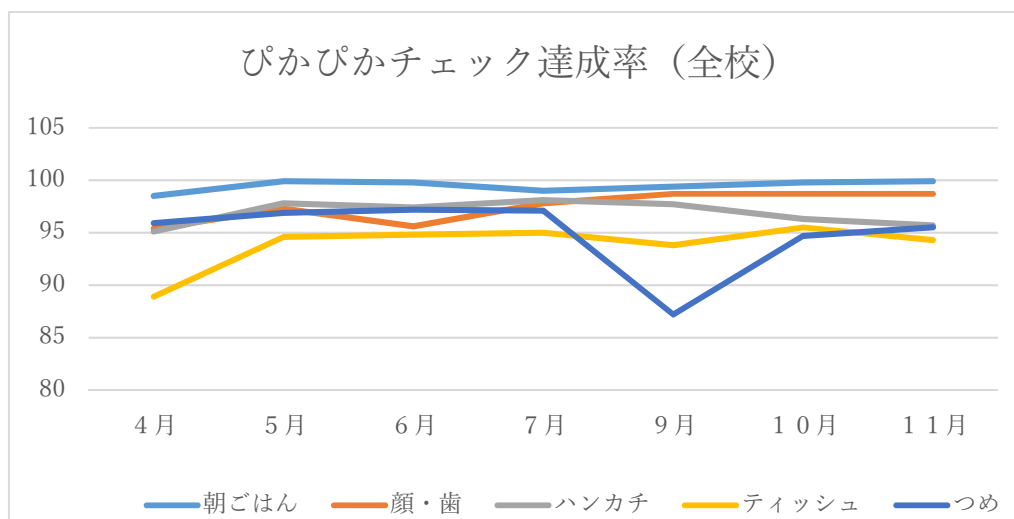
心の日の中でメディアコントロールについて考えた。また、家庭にめあてや取り組みを書いた紙を持ち帰らせることで、家庭でもメディアに対する考えてもらう機会とした。

◎ 今年度の取り組みに対する結果と考察（自己の生活習慣）

<ぴかぴかチェックの集計結果>

(%)

朝ごはん	顔・歯	ハンカチ	ティッシュ	つめ
99.5	97.4	82.1	82.1	96.3



<考察>

朝ごはんを食べてから登校するという児童は毎回ほぼ 100%である。規則正しい生活を送るためにも朝ごはんを食べてから登校するという習慣は継続させたい。

ハンカチ・ティッシュの持参率が低いことが課題であると考えられる。また持ってきてはいるがランドセルの中にあると話す児童も多いことから、ハンカチ・ティッシュを持参する意味を、児童だけでなく保護者へ啓発することも必要だと考える。

<アウトメディアのめあて(5年生の学級の実態)>

- チャレンジするコースは？
- A) 1日テレビ・ゲーム・ネットに触れない。 1人
 - B) 学校から帰ったらテレビ・ゲーム・ネットに触れない。 3人
 - C) ()時以降はテレビ・ゲーム・ネットに触れない。 8人
 - D) 食事の時はテレビ・ゲーム・ネットに触れない。 8人
 - E) テレビ・ゲーム・ネットに触れる時間を決める。(1日 分まで) 9人
- 誰とチャレンジする？
- ㊦家族で6.9% ㊩親子で13.8% ㊫子供だけで79.3%
- 生み出された時間をどう使う？
- 家族とふれあう・読書・お手伝い・勉強・運動・早めに寝る

めあての達成率(12月) 82.8%

寝た時刻の平均 9時30分

<考察>

家庭で決めたルールを守ろうと頑張っている姿が見られた。日ごろから、自分で気を付けられるようになるように指導を進めていきたい。

<疾病異常の治療率について>

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全校
視力	69.2	83.3	74.1	77.5	73.1	67.8	71.4
歯科	82.6	60.0	66.7	74.1	65.0	69.2	68.8
眼科	100	-	100	80.0	0	60.0	68.8
耳鼻科	82.1	-	-	78.3	-	-	79.2

<考察>

夏休み前の面談で、未受診の子には担任から声を掛けている。

眼科・耳鼻科の受診率は比較的良いが、視力・歯科の受診率が低いことが課題である。面談時の声掛けだけでなく、ほけんだより等でも受診を呼び掛ける必要があると考える。

(3) 食育指導

① 給食の献立を活用した食に関する指導

- 献立の内容を放送で紹介したり、給食室前のホワイトボードに掲示したりすることで、自分が食べているものが体を作っているもととなっていることを知ることができるようにした。
- ふるさと給食週間や学校給食週間など、地域の食材や行事食の紹介をすることで、食に興味をもてるようにした。

② 各学年の実態に応じた5分間指導

- 朝活動の時間に栄養教諭が各学級を訪問し、学年の学習内容や発達段階に応じた食に関する指導を実施した。
 - ・ 1年、ひまわり学級「給食室の中を見てみよう」
 - ・ 2年「日本の12月の行事」
 - ・ 3年「すがたを変えるお米」
 - ・ 4年「かんで食べるとなんでいいの」
 - ・ 5年「だしで味わう和食の日」
 - ・ 6年「成長期とカルシウム」

③ おやつを題材とした授業（４年）

- 事前におやつのとりの方についてのアンケートをフォームを使って実施した。また、ムーブノートやオクリンクを活用して、自分に合ったおやつのとりの方について考えさせた。

◎ 今年度の取り組みに対する結果と考察（食に関する授業）

- ワークシートだけではなくオクリンクやムーブノートを使用したことで、不易と流行を取り入れた食に関する授業を行うことができた。
- 事前にフォームを使用しておやつアンケートを実施したことで、児童が自分のおやつのとりの方について主体的に考えながら授業に取り組むことができた。
- 事後学習として一週間のおやつに記録をつけることで、家庭と連携した取り組みを行うことができた。

<考察>

タブレットを使用した授業を行うことで、食に関する指導の幅が広がり、児童が楽しみながら主体的に考えることができた。授業を通して、おやつを食べる児童がほとんどであり、家庭での過ごし方に応じて必要なタイミングでおやつをとっていることが考えられる。一方、自分の体に必要なおやつの量を知っている児童は少ない。望ましい生活習慣を身につけるためにも、学校給食を題材とした食に関する指導を展開していく必要がある。



（４） 安全教育

① 防災・安全指導への取り組み

- 年間４回の避難訓練を通して、安全な避難の仕方を身に付けることができたようにした。
 - ・ １回目・・ 災害時の基本的な避難経路を指導し、避難経路を確認。
 - ・ ２回目・・ 地震が発生した後の２次被害（浸水）を想定した高所への避難。
 - ・ ３回目・・ 児童への予告なしで地震の発生を告知し、避難する訓練。
 - ・ ４回目・・ 放送を聞き、様々な場所にいた時の避難の仕方を考える。
- 年度当初に引き渡し訓練を実施し、家族で家までの経路を確認する時間を作った。
- 月に１回、朝活動の時間に「安全の日」を設定し、交通・防災・生活の観点から、生活場面の写真を提示したり、ワークシートを用いたりして指導した。
- 各学年の実態に合わせて防災講座を実施した。
 - ・ １，２年「防災ダッグ」
 - ・ ３，４年「災害時判断ゲーム（クロスロード）」
 - ・ ５年「家庭内DIG訓練」
 - ・ ６年「DIG訓練」
- 年に１度、実際に起こりうる犯罪の事例等を必要に応じて紹介することで、防犯意識の向上を図り、判断力を養う。

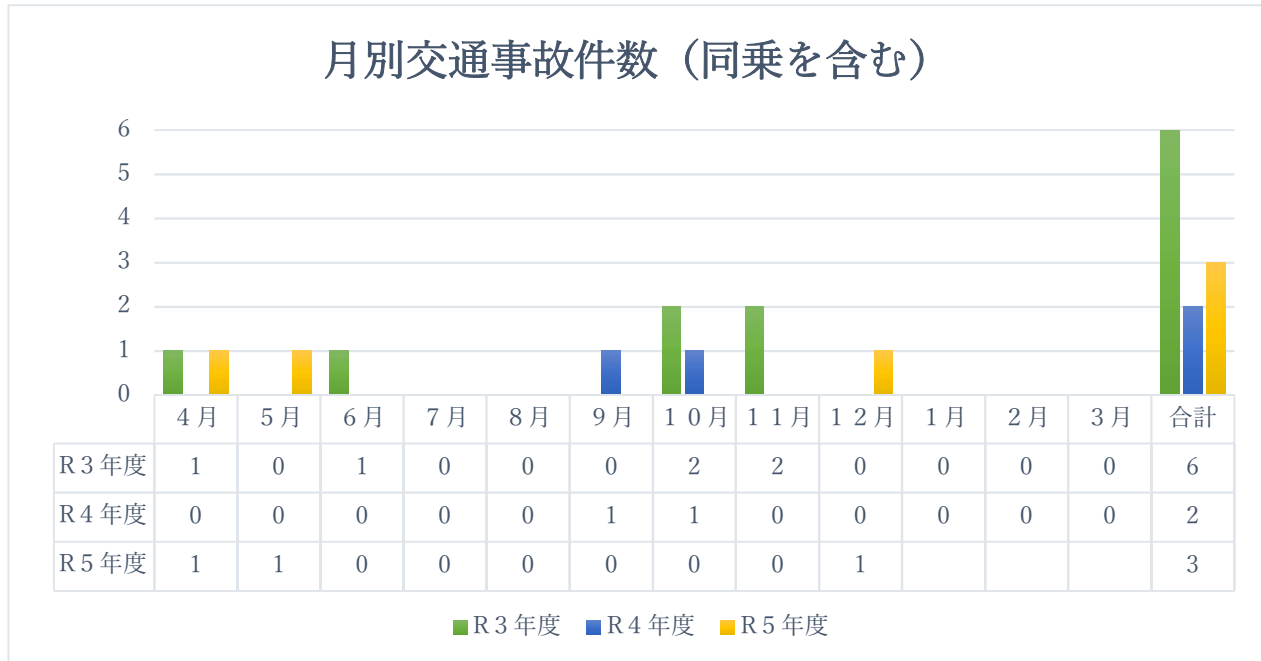
◎ 今年度の取り組みに対する考察（安全教育）

① 避難訓練の実施（考察）

１回目から３回目までの避難訓練を実際に行う事で、災害発生時の安全行動のとりの方や、避難経路の確認ができた。４回目については、座学での学習となった。自分がどこにいても身を守れるように、さまざまな場所を想定して対応方法を考えた。主体的な判断ができるようになった。

② 交通、防犯教室の実施（結果と考察）

<交通事故（過去3年間の比較）>



<考察>

交通安全に関する指導では、交通の日を設定し、放送やプレゼンテーションを用いて交通安全を呼び掛ける機会を設けた。交通教室や交通安全リーダーと語る会を実施したり、事故が起こった状況から危険な点を考える活動を行ったり、実際に地域の方から連絡を受けた課題について考えさせたりすることで、自分たちの登下校の様子を振り返ることができたのではないかと考える。その成果もあってか交通事故は減少したが、危険な登下校の様子は依然として見られるため、より児童が自分事として考えられるような指導を考える必要がある。

◎『体育・安全向上プラン』に関わる学校評価アンケートの結果

Q5 遊びや運動で体力づくりに取り組んでいるか。

児童 83.6% 保護者 74.1%

Q6 健康や安全に気を付けて生活しているか。

児童 94.6% 保護者 87.9%

Q7 「早寝早起き朝ご飯」の習慣がついたか。

児童 85.4% 保護者 80.0%

<考察>

アンケート結果から、外遊びの量は昨年度とあまり変化がないことが分かった。また、コロナ禍が明けて外で元気に遊ぶ様子が見られたが、運動をしない子と、運動をしている子の差がさらに広がっている傾向が見られた。

安全については、保護者、児童ともに高い数値となっている。また、交通事故も少なく、一見安全なようにも思える。ただ、下校指導などの様子を見ると危険な場面を目にすることもあり引き続き指導が必要である。日々の指導で安全について呼び掛けるとともに、家庭と連携しながら指導していきたい。

3 来年度の取り組み（改善点）

（１）体力向上に向けての取り組み

今年度コロナ禍が明け、子供たちがマスクなしで運動場で元気よく遊ぶ姿が見られた。アンケートから、昨年度と同等程度の運動の機会があることが分かった。学校での運動だけではなく、習い事や地域クラブ等での活躍を聞くこともあり、運動の習慣がついている児童も多い。ただ一方で、学校でも外遊びをしなかったり、体育の授業でも十分な運動ができなかったりする児童も一定数いて、二極化が見られる。したがって授業内では、どの児童もめあてをもって取り組ませることで運動量を確保していく。また、今年度同様に、各運動の補助運動を取り入れながら体育の授業を行っていきたいと考える。授業外では、運動委員会を中心として運動紹介をしたり、イベントを実施したりすることで児童の運動する意欲を伸ばしていきたい。

（２）保健指導

今年度に引き続き、「ぴかぴかチェック」、「アウトメディアの日」を行うことで、生活習慣を見直したり、身の回りを清潔にしたりする意識付けをし、自ら健康であろうとする気持ちをもてるように指導していく。

（３）食育指導

ホワイトボードへの食品掲示や栄養素が分かる献立の配付など、今年度同様に食品に対して興味関心がもてるようにしていく。また、栄養教諭の教室巡回指導も今年度と同様に取り組むことで、より栄養の知識を持てるようにしていきたい。

（４）安全指導

今年度の取り組みを継続し、安全に努められるようにする。さらに、児童の危機意識を高め、どんな場所でも自ら考え安全に過ごせるような声掛けや指導をしていきたい。

IV 信頼される学校づくり

1 今年度の取り組みとその考察

(1) 情報発信

Q14. 学校は、たよりやホームページなどで情報をよく発信している。

保護者 1学期：94.1% 2学期：94.2% (+0.1%)

学校の教育活動を多くの方に知っていただくために、毎月、学校だより「ふれあい」、や学年だより、保健だより、給食だよりなどを発行し、必要な情報を発信している。学校アンケートの意見を踏まえて各種たよりをさくら連絡網でも配信をしている。

日々の活動の様子を紹介するブログも、一日1投稿を目指し、令和5年度は、2学期終了時まで約260件の記事を掲載している。



(2) 家庭・地域との連携

Q11. 学校は学習がよくわかるように教えたり、手助けしてくれたりする。

保護者 1学期：81.0% 2学期：78.0% (-3.0%)

Q13. 学校は、学習や生活について、相談しやすい。

保護者 1学期：87.6% 2学期：85.8% (-1.8%)

Q15. 学校は、保護者や地域と連携して、教育課題に取り組んでいる。

保護者 1学期：81.5% 2学期：84.8% (+3.3%)

保護者に対しては、各種たよりやさくら連絡網、ブログなどを通して、教育活動の様子を伝えたり、周知をはかったりお願いをしたりした。

6月には、コロナ禍で見送っていた懇談会を3年ぶりに実施した。当日の参加率は、参観会が91%、懇談会が56%と高い出席率なり、教職員・保護者からも好評であった。

6月8日、9日と予定していた林間学校は、1日日、北区に「高齢者等避難」が発令されたことにより日帰りとした。その後、保護者の理解を得て9月に改めて実施し、児童は2度行けたという思い出に残る林間学校となった。運動会は、昨年度同様に子供たちの演技や競技をじっくりと見ていただけるように、学年によって演技の方向や徒競走のゴール

位置を変えた。保護者が、運動場の南北に分散することでゆとりをもって参観していただくことができた。

保護者との面談、教育相談の機会は、4月のリモート面談、1学期末の教育相談（全家庭対象）、2学期末の教育相談（希望制）と当初の計画通り、定期的に行うことができた。

学校アンケートは、さくら連絡網で配信することで、約93%の保護者から回答を得られた（回答数：1学期 557/602 2学期 555/599）。結果を見ると、学習理解や挨拶、やるべきことに係る内容で、他の質問項目に比べ肯定的な割合が低かった。記述式アンケートでは、学校行事や地域の活動に対する要望が多かった。

<コミュニティ・スクール>

昨年度、コミュニティ・スクール制度を導入し、学校運営協議会が発足した。学校支援コーディネーターの助力をいただき、学校運営に対して地域からボランティアを募った。通年で活動する読み聞かせや図書館補助、学校花壇に加え、必要に応じて、家庭科のミシン実習や生活科のリース作りの学習ボランティア、学区探検の補助をお願いした。教師一人では十分な支援や見届けができないところをボランティアに補助いただき、児童の学習内容の理解や安全・安心につながった。今年度は、読み聞かせボランティアが中心になって、おはなしおんがく会『はらぺこあおむし』が行われた。自由参加にも関わらず昼休みに児童およそ200人が集まった。

また、地域企業や公的機関の協力をいただき、校外学習や講話、講座といった形で、学習内容を深化補充する機会を多く設定、実施することができた。



<創立・開校150周年記念行事等>

今年度、創立・開校150周年を迎えるにあたり、令和4年10月より学校・保護者・地域住民の代表者による実行委員会を設置し、11月22日（水）の記念式典だけでなく、記念植樹や航空写真撮影などの行事を実施した。9月には、本校とつながりの深い金原明善さんの学習漫画冊子の贈呈式を行った。編集委員や執筆者など多くの方にお越しいただき地域とのつながりを深めることができた。これらの行事は、ブログだけでなく学校だよりでも紹介し、保護者に今年度が創立開校150周年であることの浸透をはかった。



(3) 感染症対策・熱中症対策

Q12. 学校は、健康や安全に気を配っているか。

保護者 1学期：91.7% 2学期：92.4% (+0.7%)

4月、5月と日々の健康チェックや体温測定、消毒の実施など、引き続き新型コロナウイルス感染症予防に努めた。新型コロナウイルス感染症の5類移行後は、グループ活動を充実させたり、給食スプーンの提供を再開したりとコロナ前の生活に徐々に戻している。

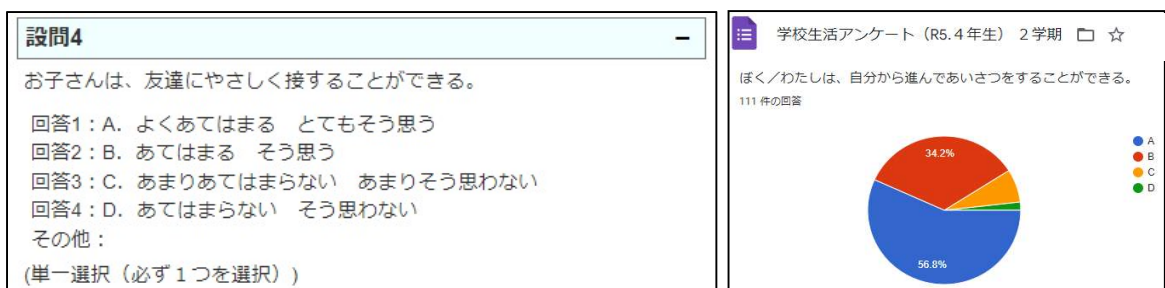
記録的な暑さになった今夏も、熱中症対策として運動場にテントを設置し、日陰で水分補給ができるようにした。また、昇降口にミストシャワーを設置し、周囲の温度を少しでも下げるようにした。その他に、部活動では、活動終了後に塩分タブレットを配付したり、1学期終業式と2学期始業式は、リモートで実施したりした。



(4) ICTの有効的な活用

教員の働き方改革が課題とされているが、ICTを活用することでの作業の軽減、効率化を進めている。

昨年度より、児童対象の学校生活アンケートは、児童一人一人がもつタブレットから「Google Forms」を使って行っている。また、保護者対象の学校生活アンケートは、さくら連絡網で配信している。担任が提出状況を確認する必要がなく、未回答の保護者に対しては、期日前に再送信が可能である。集約機能もあり作業の効率化がはかられている。



以前は、全校児童が集まったの朝会や家庭訪問を実施していたが、コロナ禍を経て現在は、「Google meet」を使ったりリモート朝会(毎月)やリモート面談(4月)を行っている。また今年度は、参観会の折に臨時PTA総会をリモートで実施し、保護者の方には教室から参加してもらうことができた。また、この「Google meet」は、資料の共有ができるため、職員会議や研修などで利用し、資料の準備時間の短縮や、印刷紙・インク代の削減につながっている。

(5) 学校教育活動の特色

本校の前身である和田尋常小学校の卒業生である、高柳健次郎氏の「世の為、人の為になる研究を」という思いを引き継ぎ、平成14年以来、発明くふうコンクール・コンテストに取り組み、本校の特色の一つとなっている。

現在は、「浜松市小中学生発明くふうコンテスト」（主催：浜松経済クラブ）と称し、夏季休業中の課題として3年生以上が取り組んでいる。本年度は、20名が入賞し、「学校賞」も受賞した。

<主な受賞内容>

第4回浜松市小中学生発明くふうコンテスト

経済クラブ理事長賞、商工会会頭賞 女性会会長賞、実行委員会特別賞、
発明研究会奨励賞（7名）

第70回静岡県学生児童発明くふう展

静岡新聞社・静岡放送賞（1名）



(6) 生活習慣について … 学校生活アンケートより

Q4. ぼく／わたしは、進んで挨拶をすることができる。

1学期 児童：87.6% 保護者：71.5%

2学期 児童：89.5% 保護者：73.5%

Q7. ぼく／わたしは、「早寝早起き朝ご飯」の習慣がついている。

1学期 児童：85.3% 保護者：79.4%

2学期 児童：85.4% 保護者：80.0%

Q8. ぼく／わたしは、やるべきこと（係、委員会、家庭学習、身支度など）が 進んでできる。

2学期 児童：89.5% 保護者：68.0%

2学期 児童：90.1% 保護者：63.8%

児童、保護者を対象とした学校生活アンケートでは、今年度7月と12月、また昨年度の12月と本年度12月を比較してみると、数値の増減はあるものの、項目による傾向に変化は見られなかった。児童のアンケートでは、項目による違いはあるが、おおむね肯定的回答が9割程度であり、学校生活に前向きに取り組んでいると感じる。

アンケート項目の「家庭での生活習慣」に関する「家庭での宿題や身支度」の結果では、児童が「できている」と評価していても、保護者は「できていない」と受け止めている傾向が大きい。

<考察>

学校教育活動では、年間計画どおりに行事や活動、校外学習などを進めることができた。5月からは、新型コロナウイルス感染症が5類移行となり、日々の教育活動における制限がなくなった。学級懇談会を再開したり、参観人数を緩和したりと学校行事もコロナ禍前に戻した。また今年度は、創立開校150周年ということで、記念式典を保護者・地域の方々と協力して挙行することができた。日々の学校生活については、今後も学校だよりやブログを定期的に発信することで、児童の頑張りを伝えていけるようにしたい。

保護者との連携は、定期的な教育相談の実施や日常的な連絡を進め、状況に応じてオンラインの活用やWEBでの配信をしながら、連絡、情報交換に努めていきたい。6月の学級懇談会は、3年ぶりともあって高い参加率であった。今後、保護者の参加率が上がるように懇談会の話題や在り方を工夫していきたい。

地域との連携は、CSコーディネーターが中心となって保護者・地域に呼び掛け、生活科や家庭科、学区探検等の学習で多くのボランティアに来ていただき、開かれた学校運営ができたと言える。

生活習慣における質問では、児童と保護者の意識のずれが見られた。特に「やるべきことを進んでできているか」「進んで挨拶ができているか」の項目である。これは、児童と保護者の基準の違いや学校と家庭での過ごし方の違いがあると思われる。そのため単純に比較すること正しいとも限らない。保護者は、声を掛けないとできないと思っているかもしれないが、家庭時間をきちんと決め習慣化させることで、進んでできることが増えるとも考えられる。また、挨拶については、できていると思う児童が約9割である。校内でも元気に挨拶をする子が多く、妥当な結果であると言える。良い意味で考えると、児童は学校と家庭を区別して生活していると言える。

<改善点>

次年度も、定期的なたよりの発行、HP、ブログでの情報発信に努めていきたい。他の配付物についても、さくら連絡網の活用を推進し、業務の効率化や資源の削減を進めていく。保護者への連絡については、計画的に進め、伝達、記述方法を見直し、保護者の視点に立ち、より分かりやすくしていきたい。

2学期に集団かぜ予防(インフルエンザ様疾患)による学級閉鎖が複数の学級であった。感染予防を徹底するとともに、長期欠席する児童への学習支援や連絡を円滑にできるように進める。熱中症対策は、児童の命に関わる大切な事である。教職員が意識を高くもち、児童への指導を徹底していきたい。

児童の情報機器を扱うスキルは高いが、情報への関わり方については課題が見られる。情報モラル教育を計画的に進めるとともに、家庭への啓発を随時発信していきたい。

学習や学校業務については、ICTの有効的な活用や支援員、学校ボランティアの協力を得ながら、効率化、負担軽減を目指した教育課程編成を目指し、今後も、より一層、保護者、地域との連携を深め、教育活動、教育環境の改善・充実に努めていきたい。



学校関係者評価

学校関係者評価は、1月11日(木)に行われた第4回学校運営協議会の際に、運営協議会委員の皆様により実施しました。

各担当教諭から今年度の本校の取り組みや児童、保護者を対象とした学校生活アンケートの結果を説明、報告し、学校運営協議会委員の理解を得られました。前回の協議会で教育課程が緻密な計画で作られていることが分かり、学校評価もそれに合わせた報告となっていて、とても分かりやすいと評価していただきました。

以下に、第4回学校運営委員会においていただいた御意見を掲載します。

【「知」知育向上プランについて】

- ICTの活用能力は、これからの時代に必要不可欠な技能であり進んで取り組んでほしい。しかし、タブレットを使った学習が進むことで正しく漢字を書けないのではないかという懸念がある。先生方には、学習内容に応じてバランスのよい授業をしてほしい。
- 「オクリンク」や「ムーブノート」といったアプリやタブレットを使った家庭学習の内容がもう少し学校関係者以外にも伝わるとよい。
- 授業改善について、子供たちに学習の達成感をもたせるために、先生たちには根気よく取り組んでもらいたい。

【「徳」知育向上プランについて】

- なかなかすべてのいじめを無くすことは難しいが、「いじめ見逃し0」という意識で取り組まれているのはすばらしい。
- 学年で行動するときは、それぞれの先生が互いに他学級の子供を見ることで情報共有ができる。ぜひ、子供のよい表れを見つけ、先生方には、たくさんの子供を褒めてもらいたい。
- 校外まなびの教室やフリースクールに通っている子の人数を教えてください。中高生になるほど利用している子の人数が増えることや学区に施設があるかどうかが重要だと分かった。今後、子供の学べる場が増えると思う。

【「体」体育・安全向上プランについて】

- 体力テストの結果がよかった学校の様子を聞いて、本校でもできることに取り組んでほしい。前回の協議会で、保護者から持久走大会を復活してほしいという声があった。運営協議会やボランティアでも手伝いはできると思うので検討してもらいたい。
- 体力は、地域のスポーツ少年団に入っている子とそうでない子の差が大きい。昼の運動機会が減り、夜はゲームをして朝は起きられないという悪循環で不登校になるという話を聞いている。アウトメディアの日を決めて、家庭に啓発しているのはとてもいい試みだと思うので、これからも続けてもらいたい。

【 学習ボランティアについて 】

- 今年度は、たくさんの方がボランティアに来ていた。九九カードのテストや習字の支援など、ちょっとしたことでも気軽に声を掛けてくれればよい。

いただいた御意見もふまえ、令和6年度の学校経営構想をまとめ2月16日(金)に行われた第5回学校運営協議会の際に、承認を受けました。